

川端文学における題目意識の統計学的特徴 — 格助詞「の」の重要性 —

館 健 一

Statistical Characteristics of Title Awareness in Kawabata Literature — The Importance of the Case Particle “no” —

Kenichi TACHI

ABSTRACT

In the titles of Kawabata's novels, the case particle “no” holds a significant position, revealing one of its distinctive features. This is particularly prominent in Kawabata's literary work, especially in “Izu no Odoriko” published by Kinseido in 1927, and it is deeply intertwined with the Shin-Kankaku-Ha period. Furthermore, there is a tendency among Shin-Kankaku-Ha writers to use this particle extensively. The usage of the case particle “no” in Kawabata's novel titles diverges from the conventional usage and classification, allowing us to discern the characteristics of this period.

KEYWORDS: Yasunari Kawabata, title of novel, the case particle “no”, statistics

I. 調査対象と方法

作家の使用した言語全てを直ちに対象とすることはできないため、本稿では小説創作にあたって意識的であったと思われる題目を調査対象とした。統計分析には各作家の全集や事典を用いて小説の分類と範囲を定め数値を算出しているが、発表年未詳の作品や未発見の作品などの不確定要素については偶然による差として留保している。調査対象の設定は三十七巻本全集および『川端康成全作品研究事典』（羽鳥徹哉，原善編 勉誠出版 平10）に従い、同書所収のものの中でも未発表の14作品と、「新進作家の新傾向解説」（大14）、「狂つた一頁」（大15）、「末期の眼」（昭8）、「文学的自叙伝」（昭9）、「船遊女」（昭29）、「古里の音」（昭33）、「古都舞曲」（昭38）、「美しい日本の私」（昭43）、「雪国抄」（昭47）の9作品は形式上の理由で除外した。その結果、小説は全418作品を一応の範囲としたが、あるいは別の解釈、算定の仕方もあるかもしれない。ま

た、割合については%で示し、なるべく正確を期すために10に満たないものは小数点第一位までを示している。

II. 結果

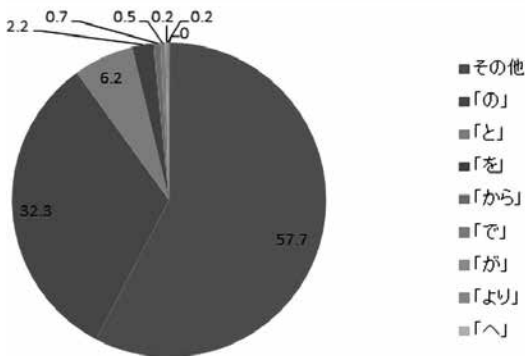
1. 川端文学における格助詞「の」の使用率

川端の全418作品のうちで格助詞「の」が用いられた例を表1に示す。総数は135作品、実に全体の32%を占めており、これは格助詞の使用比率の中では最も多い。次に多い並立語「と」の6.2%（26作品）と比較した場合、これを偶然による誤差の範囲内とは考えられず、統計学的に見て有意である（図1）。他の格助詞では連用修飾語「を」がさらに少なく2.1%（9作品）。主語を示す「が」に至っては管見の限り「夢がつくつた小説」（「文芸春秋」昭30）1作品のみ0.2%に留まっており、格助詞「の」の有意性は極めて高い傾向が認められた。

表1 川端作品における格助詞「の」の使用例

番号	題目	年号	年	番号	題目	年号	年	番号	題目	年号	年
1	月見草の咲く夕	大正	5	51	パテベビイの答案	昭和	4	101	兄の遺曲	昭和	14
2	水族館の踊子	大正	5	52	絵の匂ひから	昭和	5	102	母の初恋	昭和	15
3	林金花の憂鬱	大正	12	53	青春の特権	昭和	5	103	年の暮	昭和	15
4	葬式の名人	大正	12	54	朝の爪	昭和	5	104	女の夢	昭和	15
5	南方の火	大正	12	55	「鬼熊」の死と踊子	昭和	5	105	ほくろの手紙	昭和	15
6	明日の約束	大正	14	56	風鈴キングのアメリカ話	昭和	5	106	夜のさいころ	昭和	15
7	孤児の感情	大正	14	57	真夏の盛装	昭和	5	107	燕の童女	昭和	15
8	死顔の出来事	大正	14	58	秋消える海の恋	昭和	5	108	父の名	昭和	18
9	屋根の下の変換	大正	14	59	化粧の天使達	昭和	5	109	冬の半日	昭和	20
10	人間の足音	大正	14	60	丹波の義人	昭和	5	110	冬の曲	昭和	20
11	十六歳の日記	大正	14	61	ボオランドの帽子	昭和	5	111	女の手	昭和	21
12	伊豆の踊子	大正	15	62	霧の造花	昭和	6	112	感傷の塔	昭和	21
13	犠牲の花嫁	大正	15	63	二重の失恋	昭和	6	113	生命の樹	昭和	21
14	猪の親	大正	15	64	楽屋の乳房	昭和	6	114	花のいのち	昭和	24
15	五月の幻	大正	15	65	結婚の技巧	昭和	6	115	雨の日	昭和	24
16	夏の靴	大正	15	66	秘密の秘密	昭和	6	116	師の棺を肩に	昭和	24
17	子の立場	大正	15	67	空の片仮名	昭和	6	117	山の音	昭和	24
18	処女の祈り	大正	15	68	鉄の梯子	昭和	6	118	北の海から	昭和	25
19	雀の嬉劇	大正	15	69	騎士の死	昭和	6	119	天授の子	昭和	25
20	村の選手	大正	15	70	旅の者	昭和	7	120	あやめの歌	昭和	26
21	龍宮の乙姫	大正	15	71	浅草の姉妹	昭和	7	121	富士の初雪	昭和	27
22	伊豆の帰る	大正	15	72	妹の着物	昭和	7	122	川のある下町の話	昭和	28
23	温泉場の事	大正	15	73	踊子と異国人の母	昭和	7	123	東京の人	昭和	29
24	一人の幸福	大正	15	74	結婚の眼	昭和	7	124	ある人の生のなか	昭和	30
25	屋上の金魚	大正	15	75	貞操の番犬	昭和	7	125	少女A子の場合	昭和	30
26	金銭の道	大正	15	76	舞踊会の夜	昭和	7	126	風のある道	昭和	32
27	彼女の盛装	大正	15	77	浅草の九官鳥	昭和	7	127	夫のしない	昭和	33
28	むらさきの茶碗	大正	不明	78	ガンベツタの恋物語	昭和	7	128	秋の雨	昭和	37
29	薔薇の幽霊	昭和	2	79	父の十年	昭和	7	129	木の上	昭和	37
30	夜店の微笑	昭和	2	80	秋風の女房	昭和	8	130	人間のなか	昭和	38
31	倉木先生の葬式	昭和	2	81	翼の抒情歌	昭和	8	131	竹の声桃の花	昭和	45
32	処女作の祟り	昭和	2	82	藤の花と苺	昭和	8	132	友人の妻	昭和	47
33	駿河の令嬢	昭和	2	83	夏の宿題	昭和	8	133	七人の妻	昭和	不明
34	貧者の恋人	昭和	2	84	学校の花	昭和	8	134	権ノ木ノ話(もみのきの話)	昭和	不明
35	海の火祭	昭和	2	85	正月の旅愁	昭和	9	135	夫人の探偵	昭和	不明
36	神の骨	昭和	2	86	夢の姉	昭和	9				
37	毛眼鏡の歌	昭和	2	87	姉の和解	昭和	9				
38	スリの話	昭和	2	88	薔薇の家	昭和	9				
39	時雨の駅	昭和	3	89	故郷の踊	昭和	9				
40	母の誕生	昭和	3	90	舞姫の層	昭和	10				
41	保護色の希望	昭和	3	91	弟の秘密	昭和	10				
42	死者の書	昭和	3	92	イタリアの歌	昭和	11				
43	母国語の祈禱	昭和	3	93	コスモスの友	昭和	11				
44	母の眼	昭和	3	94	花の湖	昭和	11				
45	花園の犠牲	昭和	3	95	花のフルツ	昭和	11				
46	秋の雷	昭和	3	96	乙女の港	昭和	12				
47	綴長の探偵	昭和	4	97	夏の友情	昭和	12				
48	離婚の子	昭和	4	98	試験の時	昭和	13				
49	閨房の舞踊	昭和	4	99	母の読める	昭和	14				
50	花束の時間	昭和	4	100	故人の園	昭和	14				

図1 川端作品における格助詞の割合

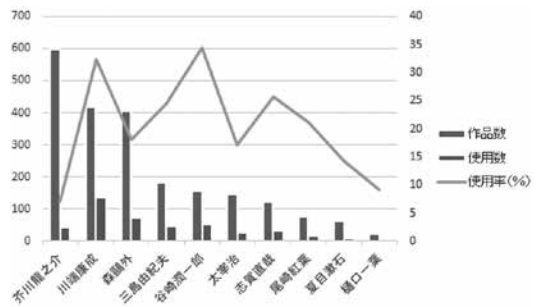


2. 他の近代作家との比較

他の近代作家の場合では、たとえば夏目漱石¹⁾の場合が14% (63作品中9作品)、芥川龍之介の場合が7.0% (598作品中42作品²⁾)であり、これらに比べて32%という数値は極めて有意である。これはおそらく近代作家の中でも稀なものと推測されるが、もちろん近代作家の全作品を正しく把握し、それと比較して川端の特殊性を観測することは出来ない。そのため、ここでは区間推定の考え方を援用して統計学的にこの問題を捉えてみよう。

図2に近代作家の中から夏目漱石、森鷗外、尾崎紅葉、樋口一葉、谷崎潤一郎、芥川龍之介、志賀直哉、太宰治、三島由紀夫の9人を抽出し、それぞれの格助詞「の」の使用率を示した³⁾。信頼区間を求める際の計算式は〈標本平均 $\pm t \times$ 標本標準偏差 $\div \sqrt{\text{標本の数}}$ 〉となるので、近代文学界全体の格助詞「の」の題目使用率はおよそ13.3～17.3%ということになる。なお、ここでは先の9人に川端を加えた時の標本平均19.8に信頼係数95%のt値を用いて算出したが、これは母平均が95%の確率で推定した信頼区間に含まれるという意味ではない。正しくは、母集団から標本を取り、その平均から信頼区間を求める作業を100回くり返した場合に95回はその区間の中に母平均が含まれるという意味である。したがって、川端の32%、谷崎の34%という数値は残りの5%に該当する、ごく稀に起こり得るものと判断できる。分母となる川端の作品数は谷崎の倍以上にもなるため、ここではより価値の高い数値と見てよさそうである。

図2 主要作家における作品数と使用率

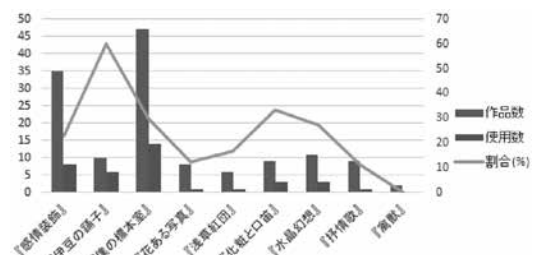


3. 各作品集における使用率とその推移

川端の作品集のうちで格助詞「の」を用いた題目の割合が最も多いのは『伊豆の踊子』(金星堂 昭2)であり、収録された全10作品、すなわち「白い満月」(大14)、「招魂祭一景」(大10)、「孤児の感情」(原題「落葉と父母」大14)、「驢馬に乗る妻」(大14)、「葬式の名人」(原題「会葬の名人」大12)、「犠牲の花嫁」(大15)、「十六歳の日記」(原題「十七歳の日記」大14)、「青い海黒い海」(大14)、「五月の幻」(大15)、「伊豆の踊子」(大15)のうち、実に6作品にも上っている。川端作品全体に占める割合32%と比較してもこの数字は格段に高く、題目設定の統計学的特徴を際立たせている。

図3に処女集『感情装飾』発表から十年以内に発刊された単行本所収の使用率を示す。『伊豆の踊子』では60% (10作品中6作品)、『僕の標本室』(新潮社 昭5)では29% (47作品中14作品)、『花ある写真』(新潮社 昭5)では12% (8作品中1作品)、『浅草紅団』(先進社 昭5)では16% (6作品中1作品)、『化粧と口笛』(新潮社 昭8)では33% (9作品中3作品)、『水晶幻想』(改造社 昭9)では27% (11作品中3作品)、『抒情歌』(竹村書房

図3 各作品集における使用率



昭9)では11%(9作品中1作品⁴⁾、『禽獣』(野田書房 昭10)では0%(2作品中該当なし)、となっており、多少のばらつきは認められるものの、全体としてはやはり『伊豆の踊子』が大半を占めていることがわかる。詳細については次稿に譲る。

4. 新感覚派の活動期間における使用率

進藤純孝⁵⁾によると、たとえば横光の文学銃後運動をもって文学思潮としての新感覚派の活動期間は終焉したということである。今仮にこうした定義に従えば、時期的には『文藝時代』創刊の大正十三年頃から昭和十五年頃までの作品が対象ということになる。

このことを念頭に置きつつ、区間の幅を五年とした時の使用割合の推移を図4に示す。大正五年から九年にかけては0.4%(2作品)に留まったものが、大正十年から十四年にかけては2.1%(9作品)と増加し、次ぐ大正十五年から昭和五年にかけては11%(49作品)と激増する。その後の区間では6.9%(29作品)、3.5%(15作品)と緩やかに減少し、昭和十六年から二十年にかけては0.7%(3作品)と増加傾向以前の水準にまで収束している。昭和二十一年からのレンジでは1.9%(8作品)、1.1%(5作品)と微増しているが、総数や最大値に比べてもごく少数であり、データの偏りが生じたといえる確率は無視できるほど低い⁶⁾。この結果、格助詞「の」の使用頻度のボリュームゾーンは新感覚派としての活動期間と一致しており、これに従うと見なすことができる。

また、他の新感覚派作家から5名を抽出し、題目設定との比較を図5に示した。新感覚派作家のうち

横光利一⁷⁾は18%(全131作品中24作品)で、川端ほどではないけれども近代文学界全体から見れば決して少ない数字ではない。他では、片岡鐵兵⁸⁾が22%(全88作品中20作品)、中河与一⁹⁾が32%(全83作品中27作品)、寡作で知られる今東光¹⁰⁾と梶井基次郎¹¹⁾がそれぞれ28%(全21作品中6作品)、52%(全21作品中11作品)であり、梶井の数字は確率だけで見れば新感覚派の中でも際立った特徴を表している。むろん、これらは標本数そのものが少ないために十全な数字とは言い難い面もある。けれども、先の信頼区間を用いれば新感覚派における格助詞「の」の題目使用率はおよそ14.5%から40.5%ということになるから、新感覚派には格助詞「の」の題目を多用する傾向がたしかに認められる。

以上見てきたことに対して、帰無仮説を立て確認する。ここで論証したい仮説(作業仮定)は「川端文学における格助詞『の』の使用頻度は新感覚派の活動期間と関連性がある」(対立仮説H1)であるから、これを否定する帰無仮説(H0)「川端文学における格助詞『の』の使用頻度は新感覚派の活動期間と関連性がない」を立てて検討する。帰無仮説「川端文学における格助詞『の』の使用頻度は新感覚派の活動期間と関連性がない」を検討するためには、全体の使用頻度を母集団の値とし、活動期間外における使用頻度を標本の値として、両者に差がないかどうかを見ればよいことになる。川端の新感覚派としての活動期間と重ならない四つのレンジの合計は18作品、格助詞「の」が用いられた全作品数135の13%に過ぎない。それに対し、新感覚派としての活動期間と重なる四つのレンジの合計作品数は102作品であり、ここから大正十二年の三作品(「林

図4 格助詞「の」を用いた題目割合の推移

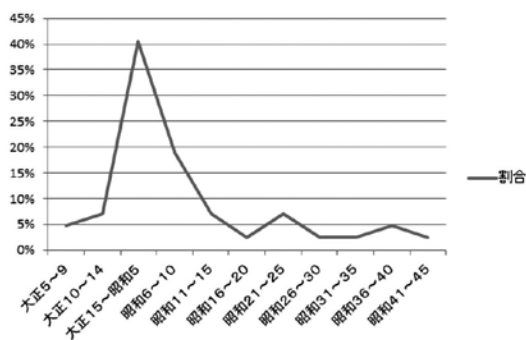
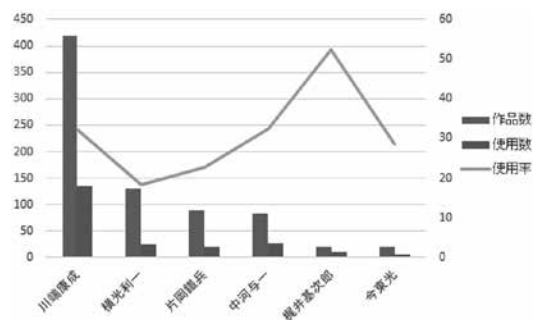


図5 新感覚派作家における使用率



金花の憂鬱」,「葬式の名人」,「南方の火」)を減じた99作品で算出すると、全体の73%を占めていることになる。この数値は全期間の平均と比べても大きく上回っており、したがって「川端文学における格助詞『の』の使用頻度は新感覚派の活動期間と関連性がない」という帰無仮説は棄却される。

Ⅲ. 考察

『日本文法大辞典』(明治書院 昭和46)によると、日本語の「の」には、格助詞、準体助詞、並立助詞、終助詞の四つの用法があり、このうち本稿で取り扱っているのは格助詞である。おしなべていえば、格助詞は下につく語によって連体修飾語を形成するもので、対象となる年代や辞典によっては「同格」や「比喩」を指摘するものもある。現代においては「所有」の意味で用いられることが最も一般的であり、たとえば「私の本」という文章は通常「私が所有している本」という意味で理解されている。しかし、文脈によっては「私が書いた本」や「私を取り扱った本」などの意味を示す場合もあり、部分的な解釈だけでは十分とはいえない。つまり、格助詞「の」は形成する連体修飾語における名詞の特性によって影響を受けるため、それらの文脈を無視して意味を決定することはできないのである。

たとえば「伊豆の踊子」。これは名詞(N1) + 「の」 + 名詞(N2) という格助詞における典型的な形であり、N1がN2の意味を限定すると通常考えられている。もちろんその意味は文脈によって想定されるので、場所(「伊豆」)の指定という解釈に限らず、物や人の状態の指定としてゆるやかに受け取ることもできるだろう。というのも、場所の指定は物語がそれぞれの場所において展開されることがあらかじめ示されているが、物語は常に一つの場所にのみ限定されている訳ではない。ともすれば、場所を変えながら、そして時間の経過を伴って展開されることがある。その時、場所を指定していたはずのN1の意味はいつの間にか変容し、「かつての伊豆」や「私の中の伊豆」など様々に解釈されてゆくことになる。「十六歳の日記」のような過去に遡って名状された題名にはその種の変容が散見され、記憶のあり方に拘泥したこの頃の特徴を表して

いる。

ところで、格助詞「の」をめぐるのは橋本進吉の「『切符の切らない方』の解釈」¹²⁾がつとに知られているが、ここでは「切符の切らない方」という言い方が「を」と「の」の混淆によって生じたものと推定され、そのままではどうしても文法的説明の出来ないものと結論されている。

我々はいつも正常な言ひ方ばかりをしない。(略)私が前に述べた混淆の如きは、その一つであつて、かやうなものを文法のきまりで解釈しようとするのは不合理であつて、もしさうすれば却つて誤つた解釈を生ずる虞があるのである。

言語は用いられる場面や状況によって変じるものであり、誤った表現であつても定着し一般化してしまうことがある。そのため、ここで論究されるべきは論理的に正しい表現などではなく、慣用に基づいた表現なのである。混淆によって生じた形は「正しい言語感覚」を持っている人には「奇異の感」を抱かせるが、一方で然るべき条件を備えた、ある限られた場合に常用されることがあるという。ここに文法の力の及ぶ限界があるというのが大体の論旨だが、「切符の切らない方」は車掌用語としての限られた範囲においてその力が発揮されており、こうした流動的な解釈のあり方はこの問題を考えていく上で示唆的である。それは、「切符の切らない方」が車掌用語という限られた範囲でその力が発揮されたのと同様、川端の言語観は新感覚派という文学思潮の、ごく限られた範囲において発揮されていたと考えられるからである。

伊藤整¹³⁾は、伝統的な文字の並べ方を否定しつつ「日本口語文体の持っていた〈話すように〉書く」という観念」を破壊した点において新感覚派を評価し、次のように記している。

内部現実と外部現実とを話し得る形式に翻訳して理解させた伝統日本語の、間のびた秩序を棄て、非秩序的な性急な内外現実の交錯を行い、錯覚的幻惑の光を心境文学の暗さにかわらしめたものであった。

ここでの要点は「内外現実の交錯」が意識的に行われたこと、すなわち伝統日本語という従来の枠組みに対して「錯覚的幻惑」をもって運動を起こしたことが評価の対象となったことにある。川端の新感覚派としての運動は一過性のものであったが、伝統日本語と対峙し、錯覚的幻惑をもって創作にあたる姿勢は晩年まで続いたといえる。しかしまた一方で、この「錯覚的幻惑」という言葉の意味がわかり易いようでいて実はとてもわかり難い。N1 + 「の」 + N2 のような基本形式であれば文法上の誤りとまではいえない場合の方が大半であるので、ここでは社会通念上ひっきりのある言葉の組み合わせ、あるいは「奇異の感」を抱かせる言葉の組み合わせと理解しておこう。

そうした観点から取り上げておきたいのが「化粧の天使達」(昭5)である。これは先の基本形ではあるものの、文法的には「天使達の化粧」となるのが一般的な理解であり、いわばN1とN2の位置が逆転している。意味としては種類を表すので、天使達の他のものでなく「化粧」であることに力点が置かれることになるだろう。だが、「化粧の天使達」といった場合には、「化粧を施した天使達」、あるいは「化粧」という言葉に含まれる天使的な別の何かを指す可能性が生じてしまう。物語は十篇(初出十三篇)からなる極めて難解なもので、登場人物として天使達が実在しているわけでもなければ、「化粧」についても「私」が女の化粧箱を買ってきたとする短い一節があるだけである。したがって、各断片から醸し出される天使的なものの化粧、あるいは化粧に見立てられた断片の集まりと見るのが穏当だろう。

また、論旨からはやや逸れるが、本文中の「歯を磨きに行くと私の口は女の髪の毛の匂いだ。」とする表現は、まさに川端による新感覚派理論の実践例と見ることができる。「新進作家の新傾向解説」では百合の見方について「百合と私とが別々にあると考へて百合を描くのは、自然主義的な書き方である」といい、「ところが、主観の力はそれで満足しなくなつた。百合のうちに私がある。私の内に百合がある。」として主観の拡大が標榜されていた。これを認識論的に説明したのが次の箇所である。

例へば、砂糖は甘い。従来の文芸では、この甘いと云ふことを、舌から一度頭に持つて行つて頭で「甘い。」と書いた。ところが、今では舌で「甘い。」と書く。またこれまでは、眼と薔薇とを二つのものとして、「私の眼は赤い薔薇を見た。」と書いたとすれば、新進作家は眼と薔薇とを一つにして、「私の眼が赤い薔薇だ。」と書く。

「私の眼は赤い薔薇を見た」から「私の眼が赤い薔薇だ」への書き換えについては、第一に動詞「見た」を述語とした動詞文が名詞「薔薇だ」を述語とした名詞文へ書き換えられていること。そして、第二に「私の眼は」から「私の眼が」と係助詞「は」から格助詞「が」に書き換えられたことが文法的展開として認められる。係助詞「は」が体言に付いてあるものを主題として提示し、判断・叙述の範囲を限定するのに対して、格助詞「が」は「の」と同じく連体格用法であり、下にくる実質名詞を限定・修飾して、所有・所属など関係を示している。つまり、ここでは「私の眼」は単に「赤い薔薇」を見たという主題提示の意味から、他でもない「私の眼」が「赤い薔薇」であるという限定的な意味に転換させていれることになり、川端はこれを主観の拡大と説明したのである。

同様に、「私の口」の中(?)が「女の髪の毛の匂ひ」へと変化したという意味を、今まさにそうした状態であることを示した一文に仕立てることで、より主観的に強調したのであり、その方法が「錯覚的幻惑」であったのだ。主観の力がそれまでの表現のあり方に満足しなくなったとは、伝統日本語のあり方に対する疑義そのものであり、かつまた新たなものへの挑戦を意味する。おそらくそれは題目の設定に際しても発揮されていたはずで、この問題を論究していくことは川端の新感覚派運動の一端を明らかにし得るに違いない。

「化粧の天使達」と同種のものとして「犠牲の花嫁」が挙げられるが、これもまた本来的には「花嫁の犠牲」となるべきものである。N1とN2が逆転されることによってその意味は一般的な意味拘束から解放され、ある種の特异性を帯びることになる。その際に実験的な近接方法として最も数多く選択さ

れたのが格助詞「の」なのであり、それこそは新感覚派的表現を最も色濃く反映しているものと結論できる。

IV. まとめ

宮島達夫『古典対象語い表』（笠間書院 昭46）によると、『万葉集』『古今集』『土佐日記』『伊勢物語』『竹取物語』『後撰集』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』『大鏡』『方丈記』『徒然草』の14作品には12955種の名詞が使用されており、異なった単語の合計23880種のうち実に54%を占めるという。一説には現代日本人は大人の場合で5万語程度というから、相当程度の名詞が語彙として修得されていることになる。「事物の名を表はすもの」（橋本進吉『改制 新文典』）などと規定される名詞は、自立語であり活用がなく、主語になり得る品詞である。しかしまた一方で、名状された言葉は社会的に認知され、使用されねばならない。言語学的に見れば、言語が発せられた場合においてその場所や時代、社会環境などによって影響を受けるのであり、意味が生成されていくことになる。だから、その社会で定着しない観念を表す単語は理論上存在しない。たまたま個人やある集団によって、とある観念や概念が獲得され、個別的に名状されたものであったとしても、社会的に位置を得られない観念は確立されずに失われてしまうのである。そうした意味からいえば、新感覚派運動によって試みられた言語的実験はすでに失われたものともいえるが、かつての若い作家たちによって新たな文学世界を切り拓こうとした動向については改めて検討する価値があるように思われる。

本稿における結論を今一度くり返せば、川端の題目設定のうちでは格助詞「の」が全体の32%を占め、統計学的な特徴を示している。この数字が他の作家と比べて格段に高いことはすでに見た通りで、使用割合の推移が新感覚派としての活動期間と重なっている点も極めて大きな特徴といえる。使用される名詞そのものは現存する言語であるから、あくまでも組み合わせによる「錯覚的幻惑」の試みであったと判断できるが、その際に最も用いられた、いわば新感覚派表現を最も端的に象徴するものこそ

が格助詞「の」であったに違いない。

小説題目とは作品世界を物語る標題として機能することを前提とし、他でもない作者によって言語的に選択されたものである。だから、題目は読み手にとっては対象特定の一助となる参照点があらかじめ提示されていることにはなるけれども、それ以前に作者はそこへの心的接触を果たしている必要がある。そこには「作者の意図」という最大の難問が横たわっているとはいえ、ある作家名の表記のもとに題目が掲げられていれば、我々は一旦それを了承し、これを数的に分析することが可能である。本稿においては上記観点から論じたため、個別の作品、文章への検討は別稿を期すことになるが、これらのことが数的な観点によって裏付けがなされたことは、研究史上において未だ異なるアプローチが可能であることを意味している。

註

- 1) 十七巻本『漱石全集』（岩波書店 昭49）
- 2) 国際芥川龍之介学会作成「芥川龍之介著作目録 1914 - 1928」（<https://akutagawagakkai.web.fc2.com/akutagawa.list.html>）
- 3) 各作家については以下に準拠し、算出している。
三十八巻本『鴉外全集』（岩波書店 昭46）、十二巻本『紅葉全集』（岩波書店 平5）、四巻本『樋口一葉全集』（筑摩書房 昭49）、『谷崎潤一郎全集』（中央公論社 昭56）、十五巻本『志賀直哉全集』（岩波書店 昭48）、十二巻本『太宰治全集』（筑摩書房 平元）、三十五巻本『三島由紀夫全集』（新潮社 昭48）なお、その結果、森鷗外が18%（405作品中73作品）、尾崎紅葉が21%（76作品中16作品）、樋口一葉が9.0%（22作品中2作品）、谷崎潤一郎が34%（157作品中54作品）、志賀直哉が25%（121作品中31作品）、太宰治が17%（146作品中25作品）、三島由紀夫が24%（183作品中45作品）という結果であった。
- 4) 『抒情歌』は「抒情歌」「浅草の姉妹」「水仙」「春景色」「青い海黒い海」「寝顔」「伊豆の踊子」「二十歳」「十六歳の日記」を収録し、本来は9作品中3作品が該当するが、「伊豆の踊子」と「十六歳の日記」は再録のため、ここでは除外して算出した。
- 5) 進藤純孝『伝記 川端康成』（六興出版 昭51）

- 6) 統計学で通常用いられる有意水準 5 % で計算すると、135作品に対して6.75となる。昭和十六年から二十年の3作品に比べて次のレンジが8作品、さらに次が5作品であることからすると、基準より小さい変動であり、これを無視することができる。
- 7) 『定本 横光利一全集』(河出書房新社) 所収の小説数で換算した。
- 8) 『片岡鉄兵全集』全一卷(改造社 昭7), 『鉄兵傑作全集』全八巻(非凡閣 昭11)
- 9) 『中河与一全集』全十二巻(角川書店 昭43)
- 10) 『今東光代表作選集』全六巻(読売新聞社 昭47)
- 11) 『梶井基次郎小説全集』全一卷(沖積舎 昭61)
- 12) 橋本進吉『国語法研究』(岩波書店 昭23)
- 13) 伊藤整「今日の文藝と新感覚派運動」(『近代生活』昭6)

抄 録

本稿は川端康成の小説における題目設定の統計学的特徴を明らかにすることを目的とし、文学思潮にまつわる外的要因との関連を検討した。その結果、以下の三点が明らかになった。第一に、川端の小説の題目においては格助詞「の」が重要な位置を占めること。川端の題目使用率は他の近代作家と比べても顕著であり、その特徴の一つを明らかにしている。第二に、これは川端の文学活動の中でも『伊豆の踊子』（金星堂 昭2）に突出して使用されており、新感覚派の時期に深く関連すること。格助詞「の」の使用頻度のボリュームゾーン（Volume zone）は新感覚派としての活動期間とほぼ一致しており、また他の新感覚派作家の平均も近代作家全体の平均を大きく上回っている。そして第三に、こうした傾向は川端の新感覚派理論に関係していること。川端の小説題目における格助詞「の」は一般的な用法と分類からは逸脱したものであり、この時期の特徴を見て取ることができる。

キーワード：川端康成、小説題目、格助詞「の」、統計